

平城宮東方官衙地区の調査

—第621次

1 調査の経緯と目的

平城宮内には行政の実務をおこなう官衙が、いくつかのエリアにまとまって配置された。第二次大極殿院・東区朝堂院の東側、東院地区との間に置かれた官衙群を東方官衙と総称している。

奈文研では、東方官衙地区の様相把握のため、継続的な発掘調査をおこなってきた（平城第154・406・429・440・466・615次）。1984～1985年度の第154次調査および2006～2007年度の第406次調査により、官衙区画Aは東西51m、南北120m以上の規模をもち、これを築地塀（SC11500・SC11510・SC11520）で区画し、さらに東西築地塀SC18975により北区と南区へと2分割することを確認した（図190）（『1984 平城概報』『紀要 2008』）。

2019年度の第615次調査では、官衙区画A南区に位置する大型基壇建物SB19000の規模と構造をあきらかにした。SB19000は官衙域の建物としては特別に大きく、基壇規模は東西約28.7m、南北約16.9m、南面と北面にそれぞれ3つの階段をもつ。

また、第615次調査ではSB19000の正面両脇で南北棟基壇建物SB20200・20210を検出した。第406次調査の成果をあわせると、SB19000を正殿、SB20200・20210、SB18980・18990の計4棟を脇殿とする建物配置と考えられる。これらの建物群からなる官衙の性格については、南北基幹排水路SD2700から出土した既知の文字資料および平安宮の官衙配置から、太政官の弁官曹司と推定した（『紀要 2020』）。

このように官衙区画A南区の重要性が高まった一方、この区画の北を限る東西築地塀SC18975についてはトレンチ調査（第406次）により部分的に検出していたにすぎず、その正確な位置や構造をあらためて確認する必要があった。また、第615次調査では南北築地塀SC11520を横断する石組暗渠SX20220を検出したものの、詳細は未確認だったため、すぐ西を流れるSD2700との関係等とともに、当該区画における排水網の様相解明が求められた。あわせて、SD2700から官衙区画の性格を示す資料の出土が期待された。

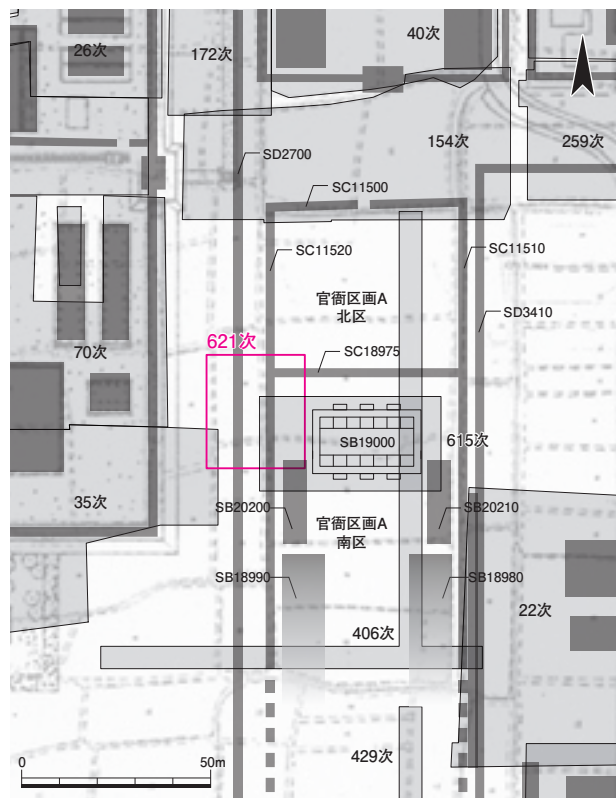


図190 第621次調査区位置図 1：2000

そこで2020年度は、築地塀による区画やSD2700を利用した排水網等、当該区画西北部の実態把握を主たる目的として、第615次調査区の西、第35次調査区の北東に調査区を設定した（図190・191）。調査面積は780㎡、調査は2020年3月16日に開始し、4月9日から9月13日まで新型コロナウイルス感染拡大防止のため中断、2021年3月8日に終了した。ここでは成果の概要を述べ、詳細は次年度の本誌にて報告する。

2 検出遺構の概要

調査区中央で平城宮の南北基幹排水路SD2700を検出した。奈良時代では機能時の堆積層を計4層確認したが、上流や下流で検出していた石組や木杭による護岸施設は本調査区では確認できなかった。SD2700からは木簡・木器・金属器・土器・瓦磚類などが出土した。木簡は、削り屑を含め2021年3月時点で約1,800点を確認している。

SD2700東岸部では、区画施設として南北築地塀SC11520、東西築地塀SC18975を検出した（図192）。SC18975とSC11520の接続部では、SC11520から東に0.6

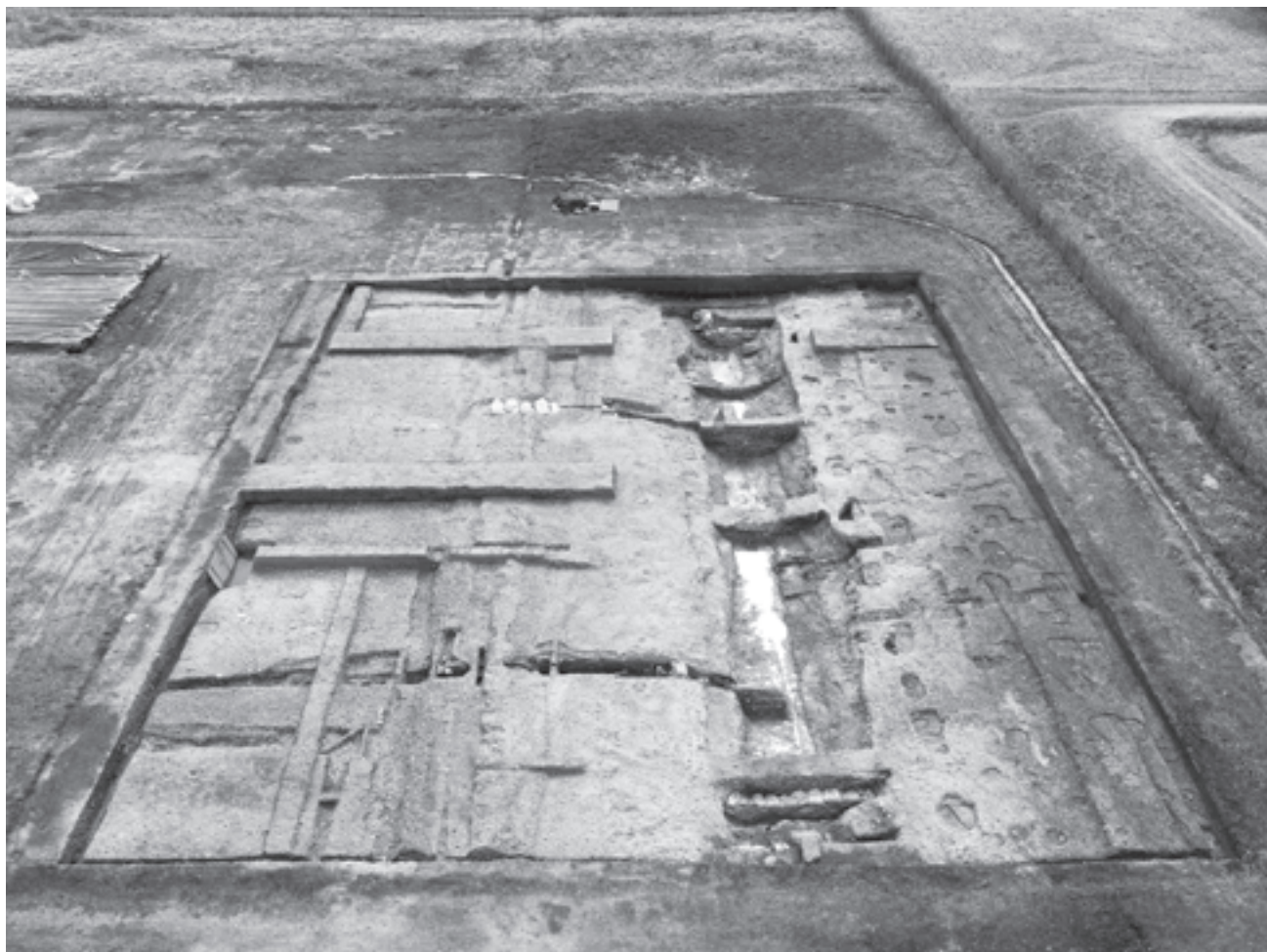


図191 第621次調査区全景（北から）

～0.7mほど離れた位置で、SC18975西端の地覆石と考えられる凝灰岩切石を検出した。このことから、SC18975とSC11520は直接には接続しないと判断できる。

SC11520の東雨落溝は、現代の水路がその位置をほぼ踏襲するとみられ、攪乱を受けて基本的には遺存していないものの、SC18975接続部においてもSC11520の東雨落溝が南北に貫流していた可能性が高い。今回検出したSC18975の位置は、東方官衙地区の北を画する東西築地塀SC11500から南150尺にあたり、官衙区画A南区の北限に関する第406次調査の成果を追認した。

排水施設として、南北築地塀SC11520を横断しSD2700へ排水する2本の暗渠を確認した。調査区南に位置する石組暗渠SX20220は、底石、側石、蓋石に自然石を用いる（図193）。調査区北に位置する木樋暗渠は、新旧2時期の木樋が上下に重なる状態で遺存していた。

SD2700西岸部では、排水施設としてSD2700へ接続する時期の異なる2本の木樋や瓦樋を検出した。また、SD2700と並走する2時期分の南北塀や、南面に廂をもつ東西棟掘立柱建物等を検出した。

今回の調査により官衙区画A南区周辺における排水網の実態が判明した。SB19000が位置するSD2700東岸部では、石組と木樋という構造の異なる2本の暗渠を設け（図194）、SD2700西岸部でも木樋や瓦樋を繰り返し設けていることを確認した。

西岸部の排水遺構は東岸部に比べ相対的に簡素であり、東岸部により手厚い排水施設を設けている様子が見えなくなった。とりわけSX20220は大型の石材を用いた構造で、平城宮でも類例の少ない施設である。排水の入念さをうかがわせるもので、SB19000を有する区画の重要性を改めて認識させる。
（大澤正吾）



図192 東西築地堀SC18975と南北築地堀SC11520（東から）



図193 石組暗渠SX20220（東から）



図194 木樋暗渠（北）と石組暗渠SX20220（南）（西から）